

令和4年度 仙台市立桂小学校研究全体計画

1 研究主題

進んで友達と関わり合い、考えを広げ深める児童の育成
～ICTの効果的な活用を通して～

2 主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は急速に変化している。このような時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようになることが求められている。

さらに、小学校学習指導要領、学習指導要領解説には、学習の基盤となる資質・能力として「言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等」が示されている。「情報活用能力」は、「世の中の様々な事象と情報とその結びつきとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である」と定義し、全ての教科等の中で育成を目指すことにより主体的・対話的で深い学びへとつながっていくことが一層期待されるとしている。

そして、各教科等の中で「情報活用能力」の育成を図るためには、必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることに配慮することも明記されている。教材・教具を有効、適切に活用するためには、教師はそれらの特性を理解し、指導の効果を高める方法を絶えず研究することが求められると書かれている。

「主体的・対話的で深い学びの実現」に向け、児童が情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいけるようにするため、情報活用能力の育成が求められている。

そこで、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、ICTの効果的な活用を通して、児童が自分の考えを広げたり深めたりしながら互いに学び合う児童の育成を目指し、授業づくりに取り組んでいきたいと考える。

(2) 本校の教育目標から

学校教育目標は「豊かな心を持ち、たくましく生きる子供の育成」である。「よく考える子供」として、「進んで考え、自分の意見を分かりやすく伝えることができる」ことを目指す児童像としている。また、協働型重点目標を「互いの思いや考えを大切にする子供を育てる」と設定し、その具現化に向けて、日々、実践を重ねている。

- 関わり合う 「挨拶の推進」
- 高め合う 「考えを伝え、聞き合う場の設定」
- 認め合う 「学級活動、児童会活動の充実」

特に、高め合う「考えを伝え、聞き合う場の設定」の根幹として「主体的対話的で深い学び

を意識した授業づくり」があり、本研究を進めることは目指す児童像の育成につながり、本校教育目標の具現化につながるものとする。

(3) 児童の実態から

今年度、「学習場面の中で友達と伝え合う活動を進んで行い、いつも考えを深めていると思う児童を60%以上にする」ことを目標に日々の教育活動に取り組んだ。7月と1月に行った児童アンケートでは、全校の90%（いつも55%、だいたい35%）が考えを深めていると回答があった。しかし、「少しは考えを深められた」と答えた児童（8%）の中には、自分の考えをまとめることが苦手と感じている児童もいることが分かった。また、「伝え合いをしてよかったことがありますか」という設問に対し、「よかったことがない」と回答している児童が5%いることが分かった。理由として、「恥ずかしいから」「自分の考えをうまく伝えられないから」「自分の考えがまとまらないから」「否定されるかもしれないから」「話がつながれないから」と答えるなど、正確でないことへの不安を感じている児童もいることが分かった。

また、今年度のICT活用について、教職員に「どんなときに活用したか」アンケートをしたところ、「情報収集」場面での活用が多く挙げられた。ICTの得意分野と言われる「共有」や「思考の整理」といった対話につながる場面での活用は少数に限られていることが分かった。ICTを効果的に活用することで、児童は友達が入力した情報を瞬時に共有することができ、なかなか自分の考えを伝えられない児童にとっては、必要に応じて友達の考えを確認しながら学びを進めていくことができるのではないかと、また「伝え合い、関わりを持たせるためのツール」になるのではないかと考える。

そこで、令和4年度は、引き続き質的な改善を図りながら、自分から進んで友達と関わり合い、考えを広げ深める児童の育成に向け、ICTを効果的に活用し、対話を通して自分の考えを広げ深められるよう授業改善に取り組んでいきたいと考えた。

(4) 今年度の研究から

今年度の研究（2年次）は実践研究を経て、以下のような成果が明らかとなった。

○対話的活動の日常化

全学年共通の「伝え方のモデル」を示したことで、自分の考えを相手に伝えることに慣れ、友達の考えを受けて自分の考えをまとめることができた。

○対話の目的の明確化

「なぜここで対話を行うのか」を明確にして授業を行うことで、児童は、自分の考えを相手に伝えたり、友達から伝えてもらったりすることで、自分の考えが広がっている姿が多く見られた。

○振り返りの充実

教師は児童がどんな振り返りができていると良いのか、具体的なゴールイメージを持ち、授業に臨んだ。児童は本時の学習を通して、何ができるようになったのか、どのように変わったのかを事実をもとに振り返ることができていた。

指導事項を明確にして、資質・能力を身に付けようとする児童の姿をできるだけ具体的にイメージし、ねらいに迫る授業ができた点が挙げられる。教師が具体的なゴールイメージを

もち、児童に示すことで、児童は自分と対話し、振り返りに生かすことができた。

一方で、以下のような課題が挙げられた。

○考えを「深める」こと

対話を通し、何ができるようになったのか、どのように変わったのか考えを「広げる」ことはできていても、自分の思いに寄せる「深める」までには至っていない児童が見られた。

○効果的な振り返りを引き出すこと

学年によっては、書くこと自体に得手不得手があり、振り返りには、書くだけでなく、話す活動等うまく組み合わせるなど言語化していくことが必要。

児童は対話を通し、自分の考えを広げることできるようになってきた。しかし、「深める」については、教師側がどんな姿を「深めている姿」とするのか、捉えが曖昧だった点が原因として挙げられる。児童の振り返りを生かしながら、「考えを広げ深める」実践を重ねていく必要がある。

(5) 今年度の取組にあたって

以上の「今日的課題から」「本校の教育目標」「児童の実態」「今年度の研究から」を踏まえ、主題の「進んで友達と関わり合い、考えを広げ深める児童の育成」に取り組むこととした。ICT活用を授業の目的とせず、児童に身に付けさせたい資質・能力があり、そのための指導の工夫の一つとしてICTを活用することとし、各教科の学習の中で、ICTの効果的な活用を通して自分の考えを広げたり深めたりしながら、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指し、実践を重ねていく必要があると考える。

3 目指す児童像

- ・自分の思いや考えを持ち、分かりやすく伝えることができる児童。
- ・友達と互いに考えを伝え合うことを通して、自分の考えを広げ深めることができる児童。

4 研究の視点

視点1 自分の考えを明確に持つための指導の工夫

- ・意欲を喚起し、自分の考えを明確に持たせるための手立て
(課題提示, 資料提示)

視点2 気付きや考えを広げ深めるための指導の工夫

- ・友達の考えの共通点や相違点に目を向けさせるための手立て
(分類・整理, 可視化, 共有, 焦点化, 関連付け)
- ・気付いたことや考えたことを、自分の考えに生かす手立て
(ポートフォリオ, 振り返り, 評価)